

述べたように本地域の旧石器時代遺跡の発見は、単発の資料が違う時代の遺構に混入した状態で発見される例が多く、ナイフ形石器など定型化した製品の出土では容易に判断できるもの、剥片などは縄文時代や弥生時代のそれと区別がつかない場合が多い。つまり、一定の時期に特定の地域で使用される石材は、その石材の出土が時代の特定に結びつくと言う意味で有効といえる。したがって、今後本地域での調査において、水晶や赤チャートという石材を注意することにより、更なる旧石器時代遺跡の認識が可能となるのである。

以上、石器群として認定のできる三つの遺跡について詳述したが、こうした資料を前提として京築地域の旧石器時代資料を概観すれば、その中心となるのはナイフ形石器を主体とする時期である。ただ、辻田遺跡（北九州市）などでは近年斜軸尖頭器を伴う石器の存在が報告されていて、中期旧石器時代の可能性について指摘する向きもある。

さて、現在のところ本地域で最も古い時期の遺跡として認識できるのは渡筑紫遺跡で、A T下位の後期旧石器時代初頭と考えられるが、ナイフ形石器が不在であり、台形様石器に代表される石器群である。これに続く時期に明確なナイフ形石器を伴う金居塚遺跡、更に次の段階として剥片尖頭器を伴う青畑向原遺跡が位置付けられる。その後、葉師寺塚原遺跡（豊前市）で出土している三稜尖頭器の段階を挟んで、原遺跡（椎田町）に

見られるような細石器の段階へと続く。このようにして、大まかに見て二万五〇〇〇年～一万三〇〇〇年前の京築地域の様子が浮かび上がってくる。

その後、時代は土器の出現とともに縄文時代（新石器時代）へと移り、新たな歴史の段階へと進む。吉木常末遺跡（豊前市）に見られるような縄文時代早期と呼ばれる時期で、この間、細石器と縄文土器の共伴する縄文時代草創期の例は認められないが、前述の細石器段階の遺跡には、草創期の可能性を否定できないものもある。

第四節 勝山町の旧石器時代資料

はじめに

旧石器時代については前述のごとくその遺跡数が他の時代と比べ圧倒的に少ないことから、人類の誕生という世界的な視野から話を進め、日本列島での出来事、九州での状況とあまり勝山町とは関係のないような範囲の話に終始した。しかし、郷土の歴史を紐解くうえで、その過程はどうしても記述する必要がある。それを踏まえない限り私たちの祖先の話は説明できない。以上の理由を理解いただき、最後に勝山町域の旧石器時代遺跡の紹介をしたい。

勝山町内において埋蔵文化財の調査が本格化するののは昭和六十年代以降である。それ以前には定村責二（故人）などによる

古墳などの遺跡の分布調査によるものがほとんどで、紹介されている資料の中には旧石器時代の石器などは認められない。しかし、発掘調査による資料にしても他の時代の遺跡から二次的に出土したものであり、もちろん製品としての定型的な石器（ナイフ形石器など）は存在しない。こうした限られた情報の中から、その可能性を示す資料について紹介しておきたいと思う。

御手水原遺跡（図2-12・1）

二〇〇〇年に県営圃場整備の調査に際し、古墳の調査に伴って四号墳付近から出土している。遺跡は標高一〇〇以上の段丘の縁辺部にあたり、水田面より一段高い微高地に立地する。資料は赤チャートを素材とした二次加工のある剥片で、長さ四九センチ、幅三一センチを測る。平坦打面を有し、右側縁の一部に若干の二次加工が認められる。

黒田地区遺跡群第三地点第Ⅱ、Ⅵ区（図2-12・2・3）

平成十五年（二〇〇三）に黒田地区の圃場整備事業に伴う調査で発見された。付近には寺田川古墳（前方後円墳）があり、水田面から一段高い標高二〇以上の中位の河成段丘上に位置する。資料は都合五点が確認されているが、その出土状況はいずれも有機的な関係は持たない。

第Ⅱ区から出土した資料は赤チャートを素材とした石核で、厚手の板状剥片を横位に用い、平坦打面から連続した剥離を試みている。第Ⅵ区からは四点の資料が出土している。2は石英を用いた剥片で、長さ一九センチ、幅八センチを測る。細石器としては石材が不適であり、技術的な特徴も看取できない。3は黒曜石を用いた縦長剥片で長さ三三センチ、幅一九センチを測り、肉眼による観察では腰岳産と思われる。表面の風化の具合などから旧石器時代の資料と判断した。4は珪質岩を用いた縦長剥片と考えられるが、節理面によって縦方向に破断しており、全体を知りえない。5はサヌカイトを用いた縦長の使用痕のある剥片で、長さ五四センチ、幅二五センチを測る。左側縁に若干の刃こぼれが認められ、素材剥片をそのまま刃器として用いたと考えられる。

池田地区遺跡群第五地点（図2-12・7）

平成十四年（二〇〇二）に諫山地区の県営圃場整備事業の調査に伴い発見された。遺跡は池田集落が営まれる標高五〇以上の高位段丘の直下に位置し、段丘上からの流れ込みと考えられる。素材となる剥片は安山岩を用い、自然面を打面として剥出された不定形の剥片である。途中から大きく欠損しているため全体を知りえないが、丁寧な二次加工で刃部を成形したスクレイパーである。表面の風化具合からすれば縄文時代の所産である可能性も否定しきれないが、ここでは一応旧石器時代のも

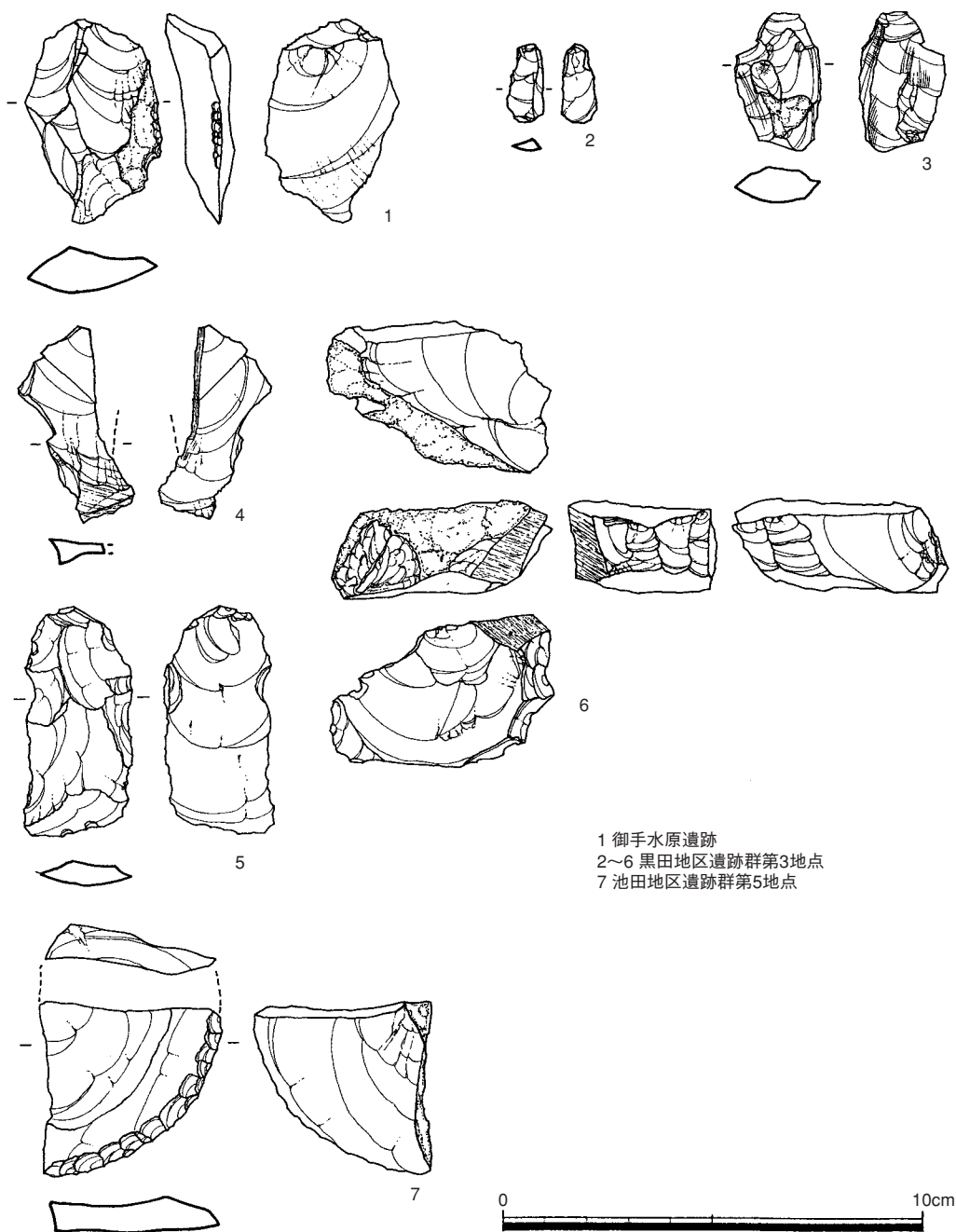


図2-12 勝山町の旧石器時代資料



写真2-1 勝山町出土旧石器時代資料

のとしておく。現存長で長さ四一釐、幅四三釐を測る。

以上、現在知りうる勝山町内の旧石器時代資料について記した。しかし、ナイフ形石器などのこの時期に特徴的な石器を伴わないことから、その様子を知らず手掛かりは限られている。ただ、石材として赤チャートを含むことは京築地域の特徴を示しており、石英の使用も同様である。また、遺跡の立地を見ればいずれも河成段丘上に位置しており、こうした特徴も矛盾しない。背後に控える平尾台の青龍窟ではマンモス象などの化石も発見されており、少なくとも二万年を前後する時期からこの勝山町域で私たちの祖先の営みがあったことは間違いない。その詳しい様子は今後の調査に委ねるしかないが、地域の歴史のページとして旧石器時代の存在を認識しておきたいと思う。